

**所在地** 宮城県岩沼市南長谷

**立地環境** 仙台平野中央南部に位置し、阿武隈川左岸に形成された標高 5.0 m 前後の自然堤防上。

**発見遺構** 掘立柱建物、堅穴建物、材木堀、大溝、大型土坑、井戸ほか

**年代** 6 世紀前半～10 世紀初頭

## 遺跡の概要

原遺跡が所在する地域は、『和名類聚抄』の記載にある陸奥国名取郡玉前郷に含まれると考えられる（第 1 図）。遺跡の周囲では現在も国道 4 号・6 号や、J R 東北本線・常磐線という重要な交通網が合流・分岐しているが、古代においては福島県中通地方を北上する東山道と、東海道から延びる連絡路（「海道」）が合する交通要衝地である（第 2 図）。このため、本遺跡の周辺ではかねてより『延喜式』に見える玉前駅家、あるいは多賀城跡出土木簡に記された玉前划が所在したと推定されてきた。さらに調査では太平洋や阿武隈川を介して運ばれたと考えられる遺物も出土しており、水陸交通の結節点としても本遺跡が機能していたとみられる。2016 年の圃場整備に伴う第 1 次調査を皮切りに、2022 年現在まで 7 次にわたる調査を継続実施しており（第 3 図）、遺構の主軸方位の変化及び重複関係から、大別してⅠ～Ⅲ期の変遷を示している。



第 1 図 原遺跡の位置

## 1. 遺構の変遷

### Ⅰ期

Ⅰ期遺構群（第 4 図）は、6 世紀前半～後半の時期を a 小期（Ⅰ-a 期。以下の各小期も同様に表記）、6 世紀末葉～7 世紀前半を b 小期、7 世紀後半～8 世紀初頭を c 小期としている（第 4 図）。

Ⅰ-a 期の遺構には D・E 地点で発見された大溝と材木堀（第 5 図）、そして C 地点の堅穴建物がある。ただし、材木堀と大溝からは現段階では遺物の出土がほとんどなく、年代的な位置づけは困難であるが、重複するⅠ-b 期遺構との関係から最も古い段階となる。確認した範囲では材木堀と大溝は約 40 m にわたって並行していることから、同時期の所産であると考えられる。材木堀は一部で西側に屈曲し、1.2 m ほどの開口部が存在する。開口部の先端には柱穴が 2 個存在することから、棟門のような簡易的な構造の門が存在していたとみられる。古墳時代中期に小規模な畑作が営まれていた地に、阿武隈川左岸における拠点のひとつとするため在地勢力が進出を図った段階と、現時点では捉えられようか。

Ⅰ-b 期の遺構は堅穴建物が中心となる。特に D・E 地点に集中する傾向がみられることから、この付近が集落の中心と目される。また F 地点や G 地点でも堅穴建物が散見できることから、自然堤防上の広範囲に集落が展開するとみられる。

I - c 期の確認遺構も竪穴建物が中心であるが、D・E地点では一辺 1.0 m ほどの方形、ないしは長方形の柱掘方を有する掘立柱建物も出現している。また東日本では希少な美濃須衛窯跡群で生産された円面硯（第 15 図）など、官衙関連の遺構・遺物が現れる。この時期の掘立柱建物の主軸は、後述するⅡ期の遺構群と比べると約 40° 前後と大きく西に傾くのが特徴である。竪穴建物は E・F 地点に多いが、B 地点では一辺が 10 m にも迫る大型竪穴建物や、猿投、あるいは湖西窯跡群で生産された須恵器を有する竪穴建物が近接して存在することから、初期駅家の可能性がある官衙施設の周囲には維持・運営に携わった集落内の有力者が居住していた可能性がある。なお、H 地点では集落の外縁を示す施設、あるいは運河の可能性もある上幅 5 m ほどの大溝の存在も確認されている。

## Ⅱ期

Ⅱ期の遺構群は、8 世紀前半～半ばの時期を a 小期、8 世紀後半を b 小期としている（第 6 図）。

Ⅱ - a 期の遺構には A - 1・2 地点で確認された大規模な区画溝（第 7・8 図）、A - 1・C・D 地点で発見された掘立柱建物（第 9～11 図）がある。この時期の遺構群の最大の特徴は、強く真北方向を意識して空間利用をしていることである。特に A - 2 地点で発見された区画溝は、北西隅となるコーナー部分であることから、この地点の東側に官衙的な機能を有した施設のひとつが存在する可能性が高い。A - 1 地点で発見された区画溝の周囲につくられた桁行 3 間以上、梁行 2 間の掘立柱建物の柱痕跡や柱穴掘方は、現時点では遺跡内で確認されたどの建物よりも大きいものであることはその傍証となろう。また D 地点で発見された大型掘立柱建物は、桁行 10 間、梁行 3 間の規模であり、確認された建物では最大規模となるが、A 地点で発見された区画の外側となることから、同時期にいくつかの官衙施設が併行して存在した可能性がある。なお、この時期の竪穴建物は、特に遺跡内の北東方向で多く認められており、掘立柱建物を中心とする官衙域と居住域が明確に分離していることから、律令期的な官衙遺構が確立した段階と捉えられる。

Ⅱ - b 期の遺構も真北方向を基軸とした土地利用や施設配置を行っている。前述した A - 1 地点及び D 地点の掘立柱建物は、Ⅱ - a 期で確認された建物とほぼ同位置で、また同様の規模で建て替えられている。なお、建物の周囲には C 地点で発見された桁行 4 間、梁行 3 間の側柱建物をはじめとする様々な建物が付設されており、官衙空間の充実が図られている。このほか、C 地点で発見された大型土坑は、底面に床板を敷いたことがうかがえる根太木痕跡が認められていることから、物資の貯蔵施設として利用されていたと可能性も考慮でき、眼前を流れる阿武隈川を介して物資の集積・集散を本遺跡内で行っていたことも想起される。

## Ⅲ期

Ⅲ期の遺構群は、8 世紀末葉～9 世紀前半の時期を a 小期、9 世紀後半以降を b 小期としている（第 12 図）。

Ⅲ - a 期の遺構になると、A・C・D 地点でみられた掘立柱建物群は姿を消し、変わって遺跡北東部である G 地点周辺でみられるようになる（第 13 図）。ここでの建物群の主軸方位は真北方向を基軸とせず、15～23 度ほど西へ傾いたものである。柱穴掘方は一辺が 0.8～1.0 m ほどの規模であり、Ⅱ期に A・C・D 地点でみられた建物群よりはやや小型となる。一方、Ⅱ期に真北方向を基軸としたつくられた A 地点の区画溝は埋没過程にありながらも機能していたようで、周囲の竪穴建物などではほぼ真北方向を主軸とするものがみられる。さらに区画溝の周辺からは遺跡内では希少な灰釉陶器や武具類（第 14 図）などが出土することから、依然として A 地点の周辺には何らかの官衙的な機能を有する施設は真北方向を基軸としながら同地で機能していた可能性が高い。なお、Ⅱ期を通じて官衙的な遺構群が配置されていた C・D 地点は、小規模な区画溝と竪穴建物群で占められるようになり、

土地利用の形態が大きく変化している。

Ⅲ－b 期については、G 地点で重複関係からこの時期の所産と考えられる掘立柱建物が存在しており、引き続き官衙施設として機能していた可能性もある。また A－2 地点では区画大溝の埋没後に鍛冶炉とみられる焼土遺構を有する竪穴建物もつくられている。しかしながら、施設の維持・運営に携わったであろう人々が居住する竪穴建物や、9 世紀末葉以降の遺物はⅢ－a 期からは大きく激減しており、どこまで機能が維持されていたのかは現時点では判断できない。

## まとめ

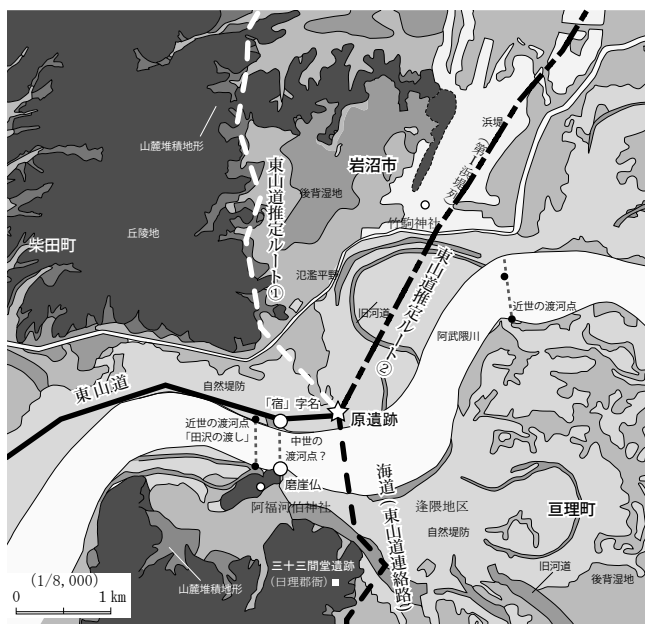
前述のように原遺跡が所在する地区は、かねてより駅家や割の存在が推定されてきた。このうち割の設置時期を明確に示す史料は無いが、関あるいは割は国境の地に設けられる事例が多い点を踏まえると、養老二年に陸奥国から石城国が分置された際には阿武隈川が境界の地となることから、これを契機に設置されたとする今泉氏の見解は強く首肯できる（今泉 2005）。駅家の設置時期については考古学的に絞り込むことは難しいが、初期陸奥国府と目される仙台市郡山遺跡が成立する時点で、これより以南の交通路の整備もある程度は進められていたと考えることが許容されるとすれば、本遺跡Ⅰ－c 期にみられる建物や遺物は玉前駅家の設置時期を示すものかもしれない、当該期の遺構の広がり把握することは重要である。

現時点において原遺跡では、明確な区画施設は A－1・2、C、D 地点で発見されているが、全容が明らかとなったものではなく、それぞれの区画範囲の把握が大きな課題となる。しかしながら、Ⅱ期については少なくとも A－1・2 で確認された区画の外側で大型掘立柱建物が存在している。このことは前述したように駅家・割、さらにはこれらに伴う正倉などといった、複合的な官衙施設がこの地で併存していたことを示しているのかもしれない。

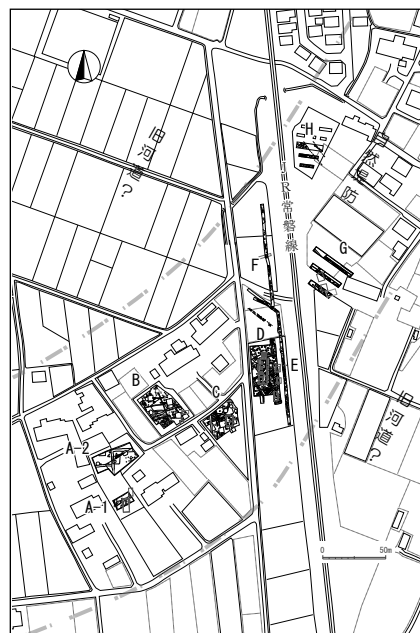
出土遺物（第 15 図）の面からは在地産の土師器・須恵器が主体的な存在で、客体的にⅠ－c 期・Ⅱ－a 期には前述の美濃須恵窯跡群で生産された可能性が高い須恵器円面硯をはじめ、猿投・湖西窯跡群の須恵器（長頸瓶・甕）や関東系土師器が含まれる。またⅢ－a 期には灰釉陶器（長頸瓶・壺）のほか、須恵器では大戸窯跡群の製品（長頸瓶）が出土しており、水上交通・陸上交通の結節点である本遺跡の性格を反映している。

## 関連文献

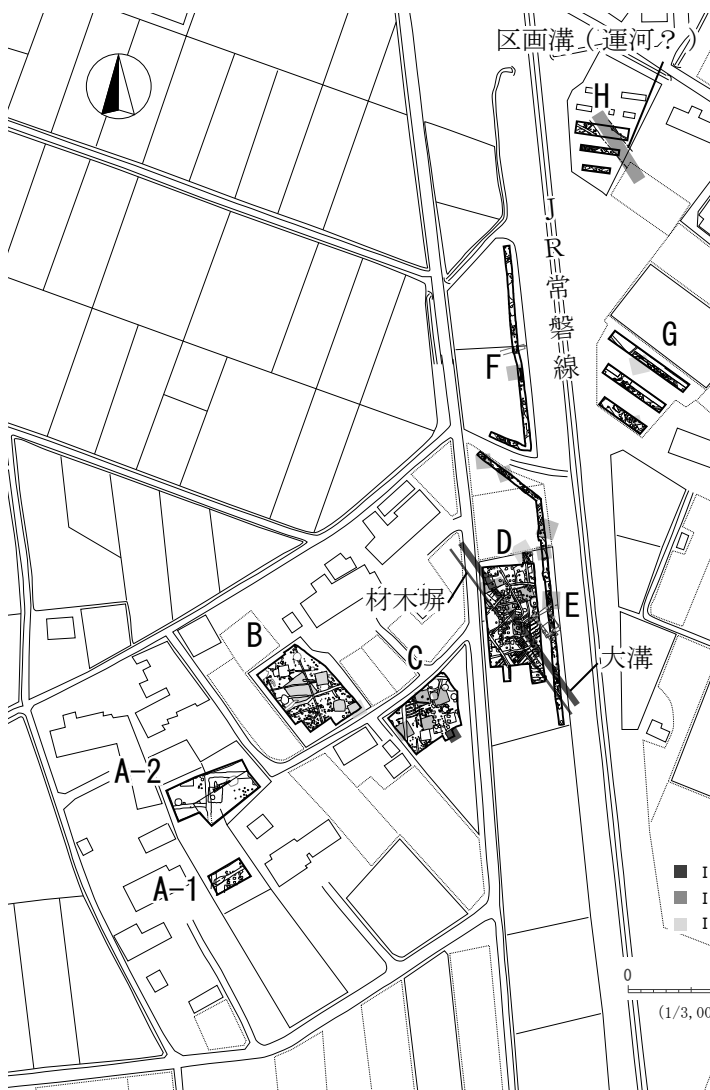
- 今泉隆雄 2005 「古代国家と郡山遺跡」『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編（1）』仙台市文化財調査報告書第 283 集  
今泉隆雄 2018 「第二部第五章 古代南奥の地域的性格」『古代国家の地方支配と東北』吉川弘文館  
岩沼市教育委員会 2018～2023a 『原遺跡第 2 次調査概要報告書』『原遺跡第 3 次調査概要報告書』『市内遺跡発掘調査報告書 1』『原遺跡第 4 次調査概要報告書』『市内遺跡発掘調査報告書 2』『原遺跡第 1 次調査ほか』『原遺跡第 5 次調査概要報告書』『市内遺跡発掘調査報告書 3』『原遺跡第 6 次調査概要報告書』『原遺跡第 7 次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第 19・21・22・24～30 集  
岩沼市教育委員会 2022 「原遺跡第 7 次調査」『令和 4 年度宮城県遺跡調査発表会発表要旨』宮城県考古学会  
岩沼市教育委員会 2023b 「原遺跡第 7 次調査」『第 49 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』  
川又隆央 2021 「原遺跡（宮城県岩沼市）の調査」『古代交通研究会第 21 回大会』資料集  
白鳥良一 2015 「特論 1 岩沼市内の東山道と玉前駅・割（関）」『岩沼市史 第 4 巻 資料編Ⅰ 考古』  
白鳥良一 2018 「第八章 四 東山道・東海道駅路と岩沼」『岩沼市史 第 1 巻 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』  
永田英明 2015 「古代東北の内陸水運－最上川・阿武隈川流域を中心に－」『日本古代の運河と水上交通』八木書店  
永田英明 2018 「第八章 三 玉前割・玉前駅と阿武隈川」『岩沼市史 第 1 巻 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』  
宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』



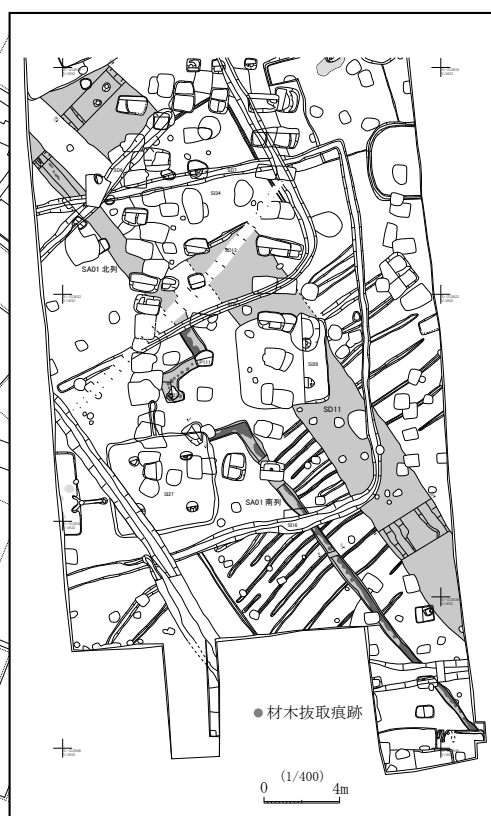
第2図 原遺跡周辺の自然地形と道路想定図  
(岩沼市 2023b)



第3図 原遺跡調査区配置図  
(新規作成)

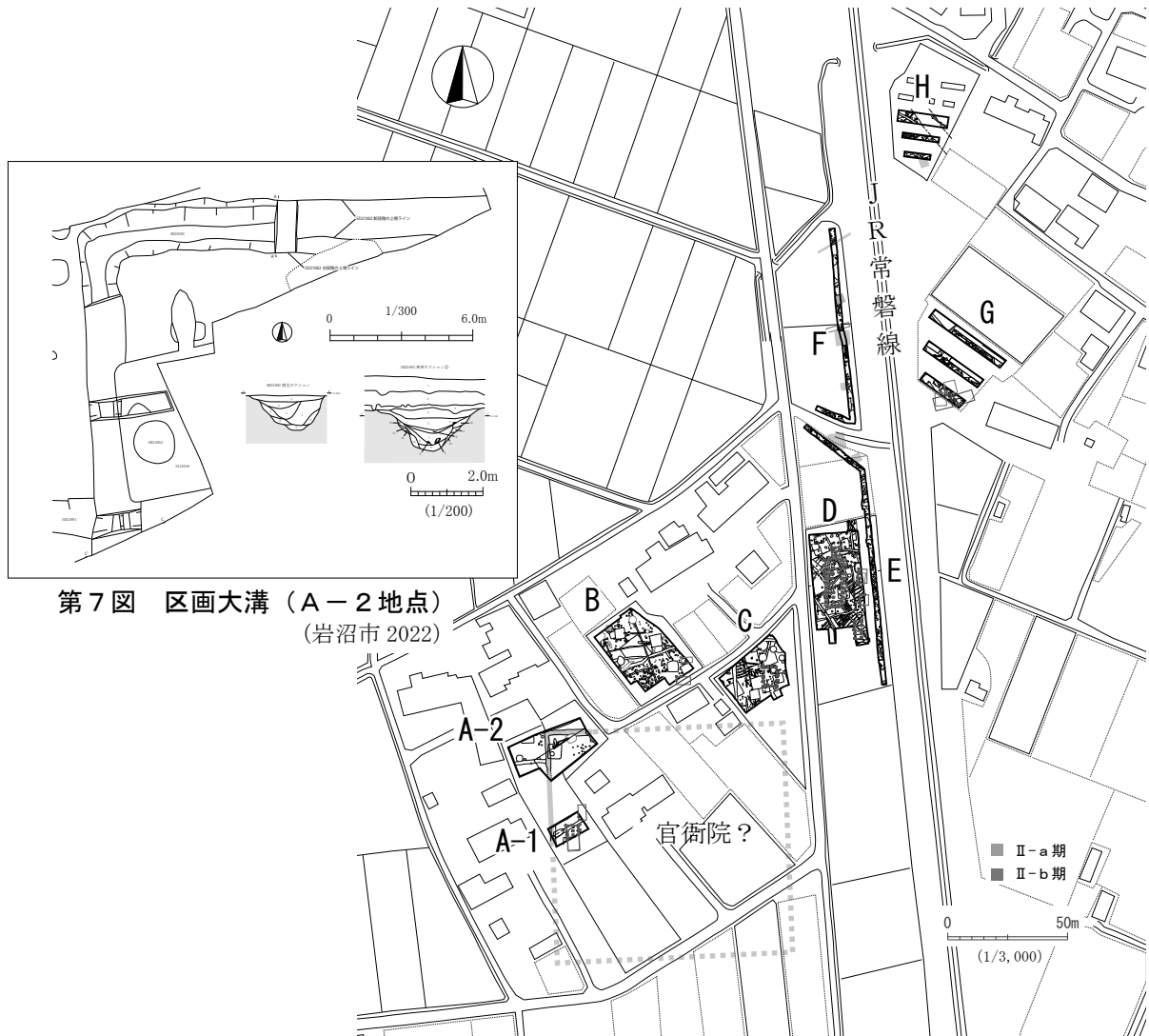


第4図 第I期遺構群 (岩沼市 2023a に加筆)

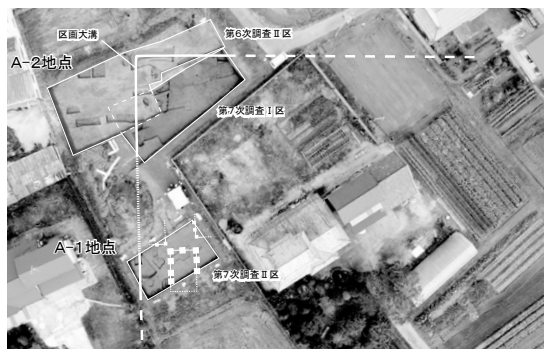


第5図 材木堀と大溝 (D地点)  
(岩沼市 2019)

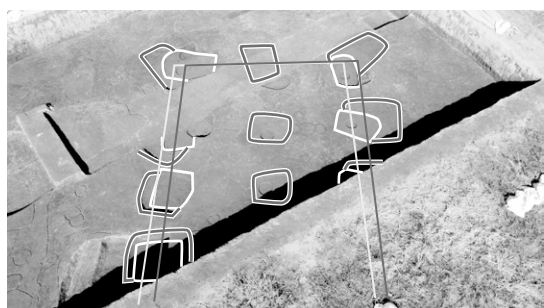




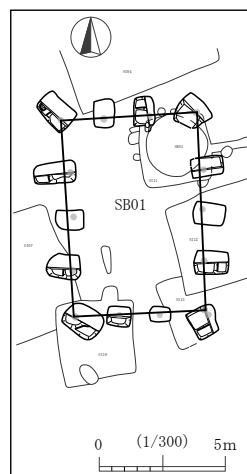
第6図 第Ⅱ期遺構群 (岩沼市 2023a に加筆)



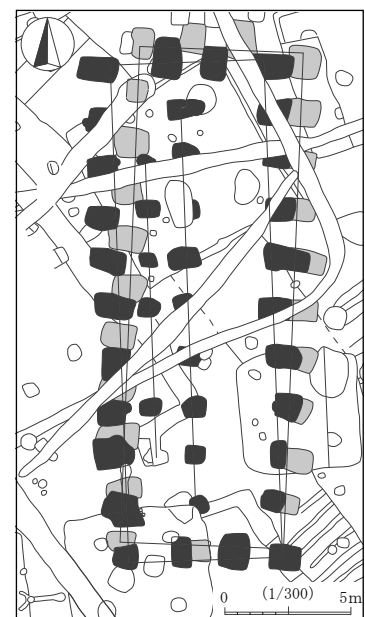
第8図 A-1・2地点の遺構群 (岩沼市 2022)



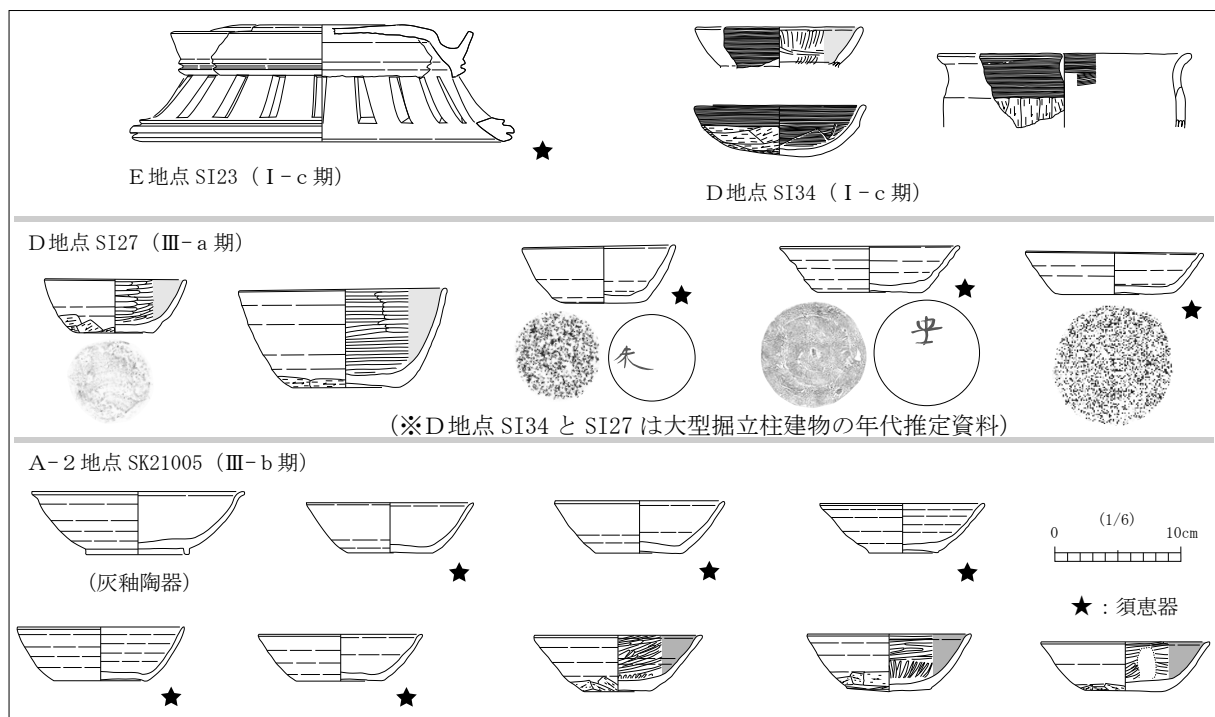
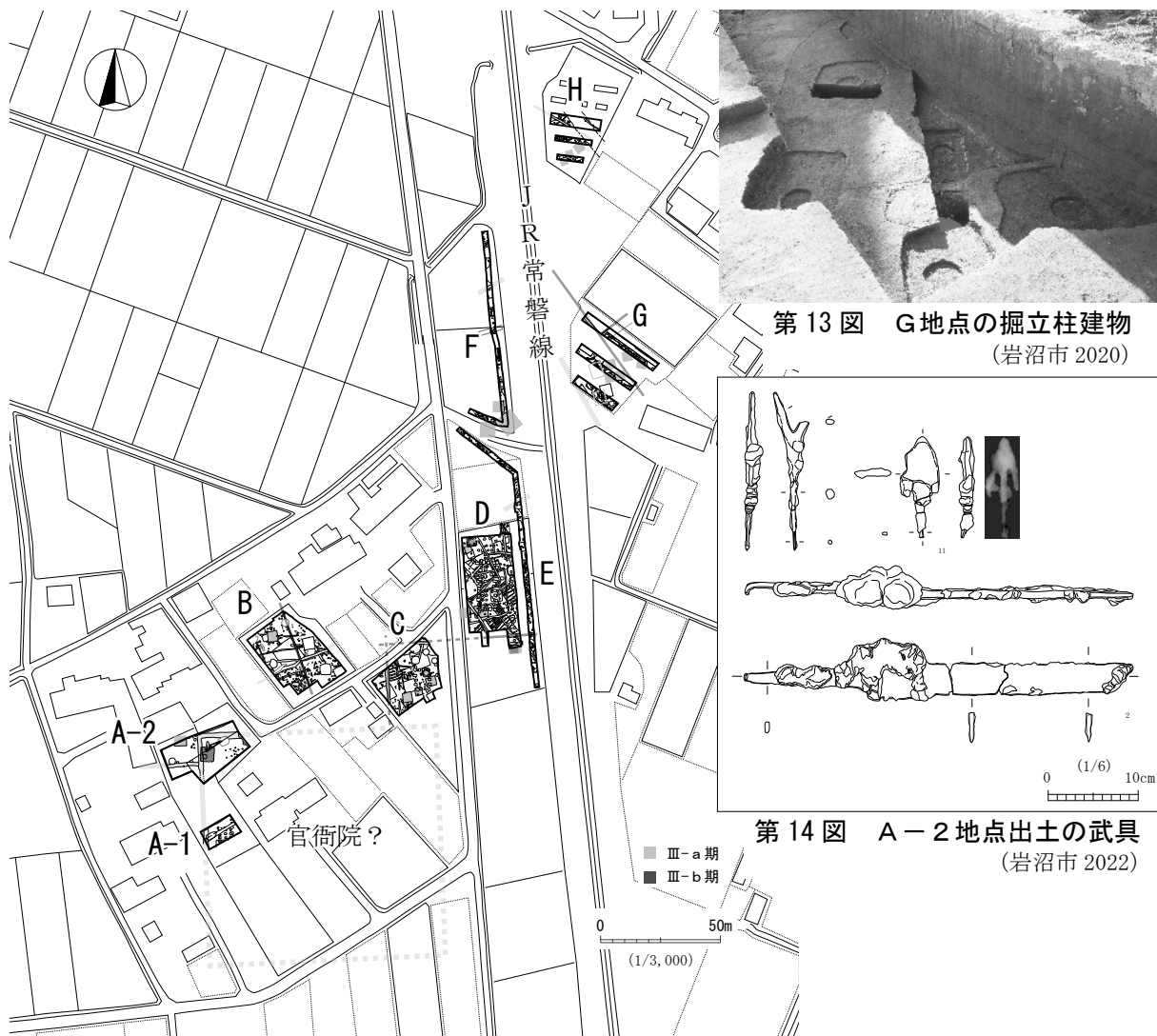
第9図 A-1 地点の建物 (岩沼市 2023b)



第10図  
C地点の建物  
(岩沼市 2021)



第11図 D地点の大型建物  
(岩沼市 2019)



第15図 原遺跡出土遺物 (新規作成)